

D. H. ロレンスの『エトルリアの遺跡』

——古層に見る生のヴィジョン

市 川 仁

〈目 次〉 はじめに

1. 野の草として
2. グレコ・ローマンとエトルリア
3. “touch”ということ
4. エトルリア人の宗教と宇宙観の変化

おわりに

はじめに

ロレンスの手紙の中で「エトルリア」の語が初めて見られるのは、1921年9月10日付のアナ・フォン・リヒトフォーヘン (Baroness Anna von Richthofen) 宛の手紙である。そこでは、トスカーナ地方の糸杉の美しさをたたえて、それがエトルリア人がまだローマに征服されないずっと古い時代からの黒々とした炎のようだと述べている。⁽¹⁾そしてさらにその中で、エトルリア人のことを “. . . slender and fine and still and with naked elegance, black haired, with narrow feet.” (*Letters* IV 84) と具体的に描写していることから、ロレンスがすでにエトルリアについての知識を持っていたことが分かる。⁽²⁾

次に言及されているのは同年10月24日付のキャサリン・カーズウェル (Catherine Carswell) 宛の手紙で、

. . . will you tell me what then was the secret of the Etruscans, which you saw written so plainly in the place you went to? Please dont forget to tell me, as they really do rather puzzle me, the Etruscans. (*Letters* IV 105)

というロレンスの言葉を読むと、具体的にエトルリアへの関心を示していることがわかる。しかしジャンク (Del Ivan Janik) も “That interest lay dormant until 1926” (78) というように、彼のエトルリアへの関心は、まるで謎を残して消えてしまったエトルリア人のように、その後数年の間まったく姿を消してしまう。もちろんこの原因のひとつは、翌年から1925年の9月まで、アメリカ大陸での生活が多くをしめていたためであろう。

ふたたび「エトルリア」という語が姿を見せるのは、奇しくもアナ・フォン・リヒトフォーヘン宛の手紙で、1926年4月4日付のものである。ここではすでに具体的に “I think I'd like to write a book about Umbria and the

Etruscans: half travel-book, scientific too.” (*Letters* V 412) と述べていて、“scientific too” とあることからかなり専門的に書いてみたいという気持ちがあったことが伺える。また同じ日付のドロシー・ブレット (Dorothy Brett)、マーティン・セッカー (Martin Secker) などの友人宛手紙でも、エトルリアへの強い関心を示すだけでなく本の出版をも表明していることから、本格的にエトルリアに取り組もうとする決意が見える。

この時期にはほぼ連日、友人・知人宛の手紙でエトルリアに対する関心とエトルリアについての本を書きたいこと、またそのためにエトルリアに関する本を集めていることなどを表明する。⁽³⁾ そしておよそ1年後の1927年4月6日、ロレンスは友人アール・ブルースター (Earl Brewster) とともにエトルリアの墓を訪ねることになる。⁽⁴⁾ 強い関心を持っていたとはいえ滞在はわずか6日間で、Cerveteri, Tarquinia, Vulci, Volterra の4か所にとどまっている。マーティン・セッカー宛の手紙では

We might go to Perugia, and I might do a book on Umbria and the Etruscan remains. What do you think? It would be half a travel book—of the region round Perugia, Assisi, Spoleto, Cortona, and the Maremma. . . . (*Letters* V 413)

と言っているので、予定では多くの墓を訪れて、かなり本格的なものにしようとしていたことが分かる。⁽⁵⁾

ロレンスのこの思いはその後も消えず、病気の悪化でかなり衰弱してきている1928年11月から12月に書かれた知人や友人に宛てた何通かの手紙の中でも、何とかしてこの本を仕上げたいという気持ちを書き綴っている。この本に対するせつないまでの思いが伝わってくるほどである。⁽⁶⁾

さらに死の3か月あまり前の1929年11月22日付マックス・モール (Max Mohr) 宛の手紙で、エトルリアについての本が届き喜んで読んでいる旨述べていることから、この時期に至ってもエトルリアに関する関心を失ってい

ないことが分かる。⁽⁷⁾ このようなことから考えると、ロレンスにとってのエトルリアは自分の生と死を託すほどのものであったことが伺われるのである。

ところで、ロレンスはなぜ西洋文化・文明の源流であるギリシア・ローマには目もくれず、もっぱらそのはざまに埋没してしまっているようなエトルリアに目を向けたのであろうか。これについてたとえばトレーシー (Billy T. Tracy) は “Most likely, Lawrence chose the Etruscans over the Greeks because he did not want to share the golden age with Bloomsbury.” (93) と言ってブルームズベリーへの対抗意識だと見ている。またホステットラー (Maya Hostettler) は “it is no longer surprising that Lawrence’s hypersensitive instinct directed him rather to Etruria than to Egypt, Greece, or India.” (234) と言って、極度に敏感な本能が当然のごとく舵を取ったと見ている。だがティンダル (William Tindall) が “This time it was the Etruscans, about whom nobody knew very much, so that Lawrence’s imagination was more than ordinarily unimpeded by fact.” (118) と言っているように、ギリシアとローマ文明のはざまにあって、その存在が歴史の闇に埋もれ、大きな謎に包まれたエトルリアの方がおそらく数倍、いや数十倍ロレンスの想像力を刺激したことも十分に考えられるであろう。⁽⁸⁾

ロレンス自身は “scientific” と言っているものの、この書はいわゆるエトルリアの専門書ではない。壁画についての解説・解釈は、デニス (George Dennis) やウィーゲ (Fritz Weege) などの書物から仕入れた知識によるものであろう。⁽⁹⁾ だがロレンスはその知識を得た上で独自の解釈を展開する。だからこそたとえばフッセル (Paul Fussell) が引用しているエメリン・ヒル・リチャードソン (Emeline Hill Richardson) の “But the reader will believe anything Lawrence says about ancient Etruria and the Etruscans at his own risk.” (163) といった意見や、ジャンクの “the accuracy or inaccuracy of Lawrence’s account of the Etruscans is finally unimportant.” (96) といった意見が出てくるのであろう。⁽¹⁰⁾ もちろん *Etruscan Places* の魅力のひとつはロレンスの想像力によって描き出されたエトルリア世界であることは言う

までもない。

ここではロレンスが展開している独自のエトルリア論を追うことによって、そこに何を託したのかを探ってみたい。

出版されたのはロレンスの死後二年たった1932年、セッカー社から *Sketches of Etruscan Places and Other Italian Essays* としてであった。

1. 野の草として

ロレンスはエトルリアの都市の消滅を “Etruscan cities vanished as completely as flowers” (18) と表現しているが、そのエトルリアの遺跡を初めて訪ねたときに次のような印象を持つ。

There is a queer stillness and a curious peaceful repose about the etruscan places I have been to . . . There is a stillness and a softness in these great grassy mounds with their ancient stone girdles, and down the central walk there lingers still a kind of homeliness and happiness. True, it was a still and sunny afternoon in April, and larks rose from the soft grass of the tombs. But there was a stillness and a soothingness in all the air, in that sunken place, and a feeling that it was good for one's soul to be there. (16)

穏やかな四月の午後、静けさに包まれ、やわらかな草間からはヒバリが舞い上がる様子をあざやかに思い描くことができる。この風景に “it was good for one's soul to be there”⁽¹¹⁾ と感じるのはロレンスばかりではあるまい。またあたりに立ち去りがたくただよう、寂寞としていながらも心を幸福感で満たしてくれるような雰囲気。これこそロレンスの中にあるエトルリアの原風景、ロレンスが描く生の原風景と言っているのではないだろうか。そしてこの原風景は消え得ぬ残像として残り、以降の彼の創作の原点となっていたよ

うに思われる。⁽¹²⁾ とすればこれは、いわばロレンス自身が理想とする生き方の逆投影とも考えられる。いずれにせよ “hypersensitive” (Hostettler 234) なロレンスの想像力をおおいに刺激する午後だったことは間違いない。

ここでたとえば “stillness” とか “peaceful”, あるいはまた “softness” とか “happiness”, “homeliness”, “sunny”, “soothingness” などといった語を拾ってみると、ロレンスの想像の世界に生きるおだやかな喜びにあふれたエトルリア人の姿を思い描くことができる。さらにこの四月の午後の印象は地上のものだけでなく、実際に地下の墓に下りていったときでも同じであった。

The tombs seem so easy and friendly, cut out of rock underground. One does not feel oppressed, descending into them. It must be partly owing to the peculiar charm of natural proportion which is in all etruscan things of the unspoilt, unRomanized centuries. There is a simplicity, combined with a most peculiar, free-breasted naturalness and spontaneity, in the shapes and movements of the underworld walls and spaces, that at once reassures the spirit. The Greeks sought to make an impression, and Gothic still more seeks to impress the mind. The Etruscans, no. . . . And that is the true etruscan quality: ease, naturalness, and an abundance of life, no need to force the mind or the soul in any direction. (19)

ここでも “easy”, “friendly”, “spontaneity”, “natural” などの語が繰り返し使われ、それをはっきりと “true etruscan quality” と呼んでいる。そして “unRomanized centuries” が示しているように、それとは対照的なものがギリシア・ローマを念頭に置いた “make an impression” とか “impress” という語である。これはエトルリアの墓から感じとったほっとするような安心感、人をそっと包み込んでくれるような柔らかさに対して、人を威圧する

ようなギリシアやローマの遺跡の威圧感を表したものにほかならない。さらにまたこのあとで、死が“neither an ecstasy of bliss, a heaven, nor a purgatory of torment” (19) だといっていることに注目すべきである。おそらくここにはキリスト教的な「パッション」が念頭にあって、それが、少し前の箇所では、エトルリアの墓の持つ特性が“the more studied or ecstatic proportion of the mental and spiritual consciousness we accustomed to” (17) とは対照的だと言っていることから、ロレンスにとってキリスト教的な死がきわめて観念的であり、かつ意識的なものであり、それに不自然さを感じていたことが分かるのである。エトルリア人が考えていたように死が生の延長であるとすれば、ことさらに死を意識しそれを怖れることはないというのであろう。

ところでエトルリア人のこの自然でおおらかな生き方はロレンスによれば、“the phallus and the arx” (20) に象徴されるという。同行した友人のブルースターが墓の扉のそばに男根崇拜石を見つけ、また入り口のそばに掘った石の家がある墓があることに注目する。ガイドから以前は男の墓にも女の墓にもすべてそれぞれ男根崇拜石と石の家があった⁽¹³⁾ということを聞き、この二つの象徴をエトルリア人を性格づける二大要素である⁽¹³⁾と考える。つまりそれこそがエトルリア人の生の根本をなすものだというのである。だが同時にそれがエトルリア滅亡の原因でもあったと見てこのように言う。

And perhaps in the insistence on these two symbols, in the etruscan world, we can see the reason for the utter destruction and annihilation of the etruscan consciousness. The new world wanted to rid itself of these fatal, dominant symbols of the old world, the old physical world. The etruscan consciousness was rooted, quite blithely, in these symbols, the phallus and the arx . . . They [The Romans] hated the phallus and the ark, because they wanted empire and dominion and above all, riches: social gain. You cannot dance gaily to the double flute

and at the same time conquer nations or rake in large sums of money.
(20)

エトルリア滅亡の原因については、一般的にはクマエの海戦で敗れたエトルリアがそれまで握っていた制海権を失い、さらに山岳地帯から下りてきたサムニウム人の進出などにより次第に衰退し、最終的にローマに征服ないしは吸収されていったという説が一般的であろう。だがロレンスは直感的にエトルリア滅亡の原因を“the phallus and the arx”にあると見た。一方ではフルートを吹いて陽気に踊り、その一方で国家征服の大事業に乗り出すことなどとてもできないだろうという。だからこそローマ帝国は“phallus”と“arx”に象徴される肉体意識に根ざしたエトルリア人を悪徳・不道德の民族として葬り去ろうとしたと見る。帝国建設の邪魔者だったというわけである。⁽¹⁴⁾そしてエトルリアは消え去った。だが、ロレンスはたまたま目にしたイタリア人の女性たちの浅黒い顔の中に、抹殺されたはずのエトルリア人の痕跡を見る。

... surely you see the lustre still of the life-loving Etruscans! There are some level Greek eyebrows. But surely there are other vivid, warm faces still jovial with etruscan vitality, beautiful with the mystery of the unrifled ark, ripe with the phallic knowledge and the Etruscan carelessness! (22)

エトルリアがたとえ押しつぶされても必ず息を吹き返す野の草のようなものだとロレンスが言う理由である。⁽¹⁵⁾

2. グレコ・ローマンとエトルリア

ロレンスが次に訪ねたのはタルキニアであった。ここではジャンクの “a contrast between Etruscan naturalness and Graeco-Roman mental knowledge” (84) という言葉にもあるように、グレコ・ローマン的なものとエトルリア的なものとの対比が行われている。そしてエトルリア人の自然な生の魅力をなおいっそう際立たせることで、そこにロレンスの理想を充足させようとしているように思われる。

There seems to have been in the etruscan instinct a real desire to preserve the natural humour of life. And that is a task surely more worthy, and even much more difficult in the long run, than conquering the world or sacrificing the self or saving the immortal soul. (32-33)

ここで “conquering the world” と “sacrificing the self or saving the immortal soul” がローマの世界征服とキリスト教における殉教と魂の救済を述べていることは明らかである。だがこの一節に表現されているように、ロレンスは、“the natural humour of life” すなわち生き生きとした生命から自ずと醸し出される気分を保持することが、世界征服や殉教や魂の救済よりもずっとむずかしく、また大事なことであると考えていた。これは “The natural flowering of life! It is not so easy for human beings as it sounds.” (56) という一節と響きあってロレンスがいかに “naturalness” を重視していたかをはっきりと示すものである。

またここでロレンスが “naturalness” に対立するものとしてあげているのが、“imposing creeds, imposing deeds, imposing buildings, imposing language, imposing works of art” (33) である。これらはもちろん、すでにあげた “impression”, “impress” と同じ意味を持っている。教義や行動の

押しつけはキリスト教、建物の押しつけはおそらくギリシアやローマの石造りの巨大な建物、言語の押しつけはギリシア語やラテン語であり、芸術の押しつけはギリシア芸術を念頭に置いてのことであろう。従って“Give us things that are alive and flexible, which won't last too long and become an obstruction and a weariness.” (33) という一節は、目の前に立ちただかるうんざりするような、そしてまた生命を圧殺するような巨大な石造物に対し、はかなく消えてもふたたび新たな生命として花開く野の草のような繊細さをこそ取り戻したいとするロレンスの切なる叫びととってよいであろう。

さらにロレンスはエトルリアとローマの奴隷に対する扱いの違いに言及してこのように言う。

It is a relief to think that even the slaves—and the luxurious Etruscans had many, in historical times—had their remains decently stored in jars and laid in a sacred place. Apparently the “vicious Etruscans” had nothing comparable to the vast dead-pits which lay outside Rome beside the great highway, in which the bodies of slaves were promiscuously flung. (35-36)

エトルリア人を「邪悪」と呼んでいたまさにそのローマ人が奴隷の死体を広い本道際に無造作に捨てていたことをあげて、ローマ人を生命の圧殺者というイメージでとらえている。そしてそこにエトルリア人との感性の違いを見る。この一節を“The slaves in the tombs are surging with full life.” (46) や “Even the peasants dwelt within walls.” (115) などと重ね合わせて読むと、ロレンスがエトルリア人のなかにきわめて繊細な感性を認め、それをいかに自分の生の理想に引きつけてとらえていたかが分かるのである。

このようにギリシアやローマとエトルリアを対比することで、たとえば後に書かれた *Lady Chatterley's Lover* (1928) の中でクリフォードの車椅子が

ブルーベルを踏みつぶしてゆく描写に象徴されるように、粗⁽¹⁶⁾暴な力が繊細な生命を情け容赦なく踏みつぶしてゆくイメージを作りあげている。だが “It is the grass of the field, most frail of all things, that supports all life all the time.” (36) というように、踏みつぶされる最も弱いはずのものこそが全生命を支えているのだといってこう言う。

Brute force crushes many plants. Yet the plants rise again. The pyramids will not last a moment, compared with the daisy. And before Buddha or Jesus spoke the nightingale sang, and long after the words of Jesus and Buddha are gone into oblivion, the nightingale still will sing. Because it is neither preaching nor teaching nor commanding nor urging. It is just singing. And in the beginning was not a Word, but a chirrup. (36)

ロレンスは、この地上の生命の流れからみれば、人間の歴史はそのうちのほんの一瞬でしかないという。従って何千年という歴史をもつピラミッドですら人間が作ったものであり、またイエスの教えも仏陀の教えも人間の意識から生まれたものであるがゆえに、一瞬のものでしかないというのだ。ナイチンゲールの歌に象徴される生命の流れは、人類誕生以前から絶えることなく流れ続けてきているのだというのであろう。そしてその生命の発露という点でエトルリア人も、野の草や木あるいはナイチンゲールのような存在に等しいのだという。そのエトルリアをローマは滅ぼした。だがロレンスは “Because a fool kills a nightingale with a stone, is he therefore greater than the nightingale?” (36) と言ってローマは本当に偉大なのかと問う。強大なはずのそのローマも滅びたではないか。だがローマに滅ぼされたはずのエトルリアは “The etruscan element is like the grass of the field and the sprouting of corn, in Italy” (36) とあるように、その根幹の命は脈々と生き続けて消えずに残っているのだという。バスを待つ女性たちの中にエト

ルリア的要素を認めたように、エトルリアは生き続けているというのである。

ところで自然の開花のような生を享受するエトルリア人の本質は、エトルリア人が残した瓶や皿にも自ずと表れているとロレンスは見て

... the vases and dishes of the Etruscans, especially many of the black bucchero ware, begin to open out like strange flowers, black flowers with all the softness and the rebellion of life against convention. ... (39)

という。ただその本質を見るためには、“those elegant “still-unravished brides of quietness”” (39) の一節に典型的に表れているわれわれの固定化した美の概念を捨て去らねばならないという。そうすることで初めてエトルリアの美のもつ生命を感じとることができるというのだ。だがこのエッセイの後半でエトルリア芸術についてのデニスの“the Etruscans never approached the pure, the sublime, the perfect beauty which Flaxman reached” (164) という見方を取り上げ、鋭い感受性を持っているはずのデニスですら芸術に対する考え方は基本的には変わらないという。そしてなかば揶揄の意味を込めて“Art is still to us something which has been well cooked—like a plate of spaghetti.” (164) と言っている。おそらくロレンスの中では、形式や慣習にとらわれることなく自然にのびやかに想像と創造の世界に生きるエトルリア人の姿と、破ることのできない厳格に規定された形式のなかで知的かつ観念的に美を作り出そうとしているギリシア以降の芸術に対する態度が対比されていたのであろう。

またここで“It is useless to look in Etruscan things for “uplift.”” (39) と言っているが、この一節からは“uplift”に対して不自然さを感じていたことが分かる。つまり、見るものをして意図的に“uplift”させようと作品に技巧を凝らすところに不自然さ、つまり生命の流れのよどみのようなものを感じ取っていたのかもしれない。これはロレンスが“ecstasy”に感じていた不自然さと同質のものである。すでに十分生き生きと快活に生きている

のに、あえて“uplift”させる必要あるのだろうかと問うているのである。

3. “touch”ということ

ロレンスはタルクィニアの壁画を見て

... the life on earth was so good, the life below could but be a continuance of it.

This profound belief in life, acceptance of life, seems characteristic of the Etruscans. It is still vivid in the painted tombs. (46)

と言う。いくたびか繰り返されるが、ロレンスが感じ取ったエトルリア人の生命観である。生を深く信頼し受け容れていたエトルリア人が、生前の姿のままに来世へと旅立って行く様子が目に浮かぶようである。おそらく壁画に描かれたエトルリア人の姿を見て、そこから発散される生命の躍動感を感じるのはロレンス一人だけではないであろう。そしてここから、壁画は“... a warning for ever against thinking how things *ought* to be, when already they are quite perfectly what they are.” (52)でもあるという。これは“uplift”や“ecstasy”をねらおうとして「こうあらねばならない」とする意図的なあるいは技巧を凝らした描き方、あるいはまたアカデミックな芸術理論に基づいた描写が、エトルリア的な生命観から見れば小手先だけのきわめてゆがんだものでしかないというロレンスの考えの表明でもある。また“already they are quite perfectly what they are”からはすでにそのままで完璧であるのになぜ技巧や理論に頼ろうとするのか、というロレンスのつぶやきが聞こえてくるようである。ギリシア人が憤りと嫉妬を込めて“Una vita di lusso”「贅沢な生活」(ラッチェ 61)と呼んだエトルリア人の宴会の様子にすら、型や技巧とは無縁のすっきり満ち足りた彼らの生命のほとばしりが見られるのだ。

そしてさらにエトルリア人のもうひとつの特質を“touch”という言葉で

使って “. . . one of the charms of the etruscan paintings: they really have the sense of touch; the people and the creatures are all really in touch. It is one of the rarest qualities, in life as well as in art. (53)” と言う。あるいはまた “a quiet flow of touch that unites the man and the woman on the couch” (54) とも言っているが、これを “It is as if the current of some strong different life swept through them, different from our shallow current today: as if they drew their vitality from different depths, that we are denied.” (56) と合わせて読むと、ロレンスが “touch” を、すべての生ける存在の奥深くからおのずとあふれ出る生命の流れの合流としてとらえていることがわかる。それをエトルリア人が体現しているとロレンスは直感的に感じ取っていたのであろう。とすれば “our shallow current” には現代人がそのような生命の流れを失ってしまったという思いが、そして “we are denied” にはそれを取り戻せないという絶望にも似た気持ちが込められていることが推測できるのである。

だがエトルリア人はこのような自由な生の流れを失ってしまい、それを奪い取ったのはローマ人であった、とふたたびローマの帝国主義への批判が始まる。ロレンスはエトルリア人の “the natural flowering of life” (56) を破壊したものこそ “a power which must needs be moral, or carry morality with it, as a cloak for its inner ugliness” (56) だという。⁽¹⁷⁾ 宴会用の長椅子に座った夫婦の陶棺は有名だが、当時のギリシア人やローマ人からすれば、女性が宴会に出るなどということは許されぬことであった。それは権力者であるローマにとっては規律や道徳を揺るがす脅威以外の何ものでもなかったであろうというのだ。一方ロレンスから見れば規律や道徳にがんじがらめすることこそ “the power of resistance to life” (56) にほかならなかった。

4. エトルリア人の宗教と宇宙観の変化

ところで、ロレンスはエトルリア人の宗教について次のように考えていた。

From the shadow of the prehistoric world emerge dying religions that have not yet invented gods or goddesses, but live by the mystery of the elemental powers in the universe, the complex vitalities of what we feebly call Nature. And the etruscan religion was certainly one of these. The gods and goddesses don't seem to have emerged in any sharp definiteness. (27)

この一節からロレンスがエトルリア人の宗教を、宇宙の根源的な力に依拠するものであり、神の概念をもたない種類のものであるととらえていることが分かる。⁽¹⁸⁾そしてその根源的力を別の箇所では“the indivisible Gods of the beginning” (36) と呼び、それを“the eternal quick of all things” (36) だと言っている。さらにその象徴こそ“mundum” (36) だというのである。またロレンスはエトルリアの宗教について“The etruscan religion, surely, was never anthropomorphic: that is, whatever gods it contained were not *beings*, but symbols of elemental powers, just symbols. . . .” (122) とも言っている。⁽¹⁹⁾

ここにはギリシア的な擬人観に対する批判の気持ちがここに込められていると言ってもよいであろう。以上のことを含めてロレンスが描いていたエトルリア人の宇宙論は次のようなものだった。⁽²⁰⁾

To the Etruscan, all was alive: the whole universe lived: and the business of man was himself to live amid it all. He had to draw life into himself, out of the wandering huge vitalities of the world. The cosmos

was alive, like a vast creature. The whole thing breathed and stirred. . . .

The cosmos was one, and its anima was one; but it was made up of creatures. And the greatest creature was earth, with its soul of inner fire. The sun was only a reflection, or off-throw, or brilliant handful of the great inner fire. (56-57)

脈打つ宇宙と渾然一体化して生き生きと生きているエトルリア人の姿を彷彿させる描写である。ロレンスはしかしエトルリアの宗教が次第にギリシアの影響を受けて人格神をもつ宗教へと変わってゆく様子を見逃すことなく “Myths, and personal gods, are only the decadence of a previous cosmic religion.” (122) と言う。さらに墓の突然の変化をすらとらえて “Then suddenly we come to the Tomb of Orcus, or Hell, which is given the fourth century as a date, and here the whole thing utterly changes.” (129) と言う。エトルリアの墓に特有の軽快な雰囲気がなくなり地獄という概念が生まれたというのだ。そしてこの変化はローマがエトルリアからその権力を奪い取った4世紀に起こったことであり、そのときにエトルリアの神秘がほとんど瞬間的に消えた⁽²¹⁾という。そしてさらに続けてこういう。

The old religion of the profound attempt of man to harmonise himself with nature, and hold his own and come to flower in the great seething of life, changed with the Greeks and Romans into a desire to resist nature, to produce a mental cunning and a mechanical force that would outwit Nature and chain her down completely, completely, till at last there should be nothing free in nature at all, all should be controlled, domesticated, put to man's meaner uses. Curiously enough, with the idea of the triumph over nature arose the idea of a gloomy Hades, a hell and purgatory. To the peoples of the great natural religions, the afterlife was a continuing of the wonder-journey of life. To the peoples of the Idea

the afterlife is hell, or purgatory, or nothingness, and paradise is an inadequate fiction. (130)

これはロレンスによる手短かなエトルリア史として述べられているのだが、それはそのままロレンスの目に映ったヨーロッパ史と見てもよいであろう。ヨーロッパ文明の源流であるとされてきたギリシア・ローマ文明のロレンスの位置づけが如実に表明されたものである。つまりロレンスによれば、偉大なはずのその文明は実は、自然のリズムに従い自然と調和していた豊かな人間の生き方を変えてしまった元凶にほかならないという。そしてこれをロレンスは壁画に描かれた地獄の出現の中に見て取ったのだ。豊かな生命体として生きていた自然が、人間の支配下に置かれ、人間の用に供されるだけの矮小なものでしかなくなってしまったというのである。人間は自然のリズムに従った偉大な宗教、というよりも生命そのものを失い、生命の大きなうねりの中で豊かに花開いて生きることができなくなり、結果、死後の世界は地獄でしかなくなってしまったという。

ここにはさらに、人類の祖先が知恵の実を口にしてエデンを失ったことに端を発する人類の歴史、さらにその結果として起こったイギリスの産業革命に対するロレンスの批判的な見方が暗示されているかのようである。そしてすでに後戻りできない道を人類は歩み始めてしまったというロレンスのため息すら聞こえてくるようでもある。

おわりに

これまで見てきたように、ロレンスがまずエトルリア人の姿の中に注目したのは、自然とわき上がる生命の豊かな流れであった。そしてその流れのままに生きることこそロレンスにとっての生の理想であった。このような点から、たとえばトレーシーは “He was concerned with the task of reawakening modern society, not with the exactitudes of scholarship”

(126)と言って現代社会再生を目的としているという。あるいはフッセルは、ロレンスの4冊の旅記 *Twilight in Italy, Sea and Sardinia, Morning in Mexico* そして *Etruscan Places* を人間の人生の4つのステージを表すものとしてとらえ、晩年に書かれたということもあってであろう、*Etruscan Places* を挽歌を歌い平安を願う老齡期の書と見なし “dying happily” (164) を求めたものだという。一方ジャニクは

“In any case, Lawrence’s goal was not to popularize or emulate nineteenth-century scholarship but to give an account of the physical and imaginative worlds which he had himself experienced.” (80)

と言って、ロレンスがエトルリアに託して自ら身をもって体験した世界と想像の世界を披瀝しようとしたものだという。そしてその世界とは “a world in which the individual need not be at odds with his community might be possible” (97) だという。さらにはまた、ロレンスがしきりにギリシア・ローマとの対比でエトルリアを論じているところから、オーは

Lawrence is rewriting, through his historical imagination, the colonial history of Europe by switching the core of the European culture from the “imposing” Roman Empire to the “life-loving” Etruscan society. (58)

と言って、ヨーロッパ植民地主義の歴史の書き換えとしてとらえている。

ところで *Etruscan Places* を書いた後の、最晩年のエッセイである *Apocalypse* に目を移してみると、その中でロレンスは、コスモスから見放されて断片と化した現代人にコスモスとの合一²²を呼びかけている。おそらくロレンスの目には、現代人が宇宙との有機的な結合を断ち切られてしまっていると映り、それと同時に、やはり宇宙との有機的結びつきを失って滅びていったあのエトルリア人の姿が二重写しになっていたことであろう。ロレンスは、ギリシ

アの影響がまだ薄く、ローマによって変質させられていない時代のエトルリア人に、宇宙と渾然一体化して生きているというイメージを読み取り、いわば人類の古層に生きた人間の生き方に迫ろうとしていたとも言えるのである。そしてそこに本質的な人間の存在様式を探ろうとしていたように思われる。それはたとえば彼が *The Rainbow* 執筆の目的としていた“carbon” (*Letters* II 183) の次元の人間を求める気持ちにも通ずるともいえよう。カーバイトのランプを灯しながら真っ暗な地下墳墓に入っていく、ランプの光で浮かび上がった壁画を見て、はるか昔に思いをはせ、遠い過去に生きた人たちの息づかいを感じていたにちがいない。暗い闇の先にある最古層の人間の生き方に探し求めていた生のヴィジョンを見ることで、今に生きる同時代人の生のあり方を重ね合わせようとしたことが読み取れるのである。

〔註〕

- (1) “This is Tuscany, and nowhere are the cypresses so beautiful and proud, like blackflames from primeval times, before the Romans had come, when the Etruscans were still here. . . .” (*The Letters of D. H. Lawrence* IV 84)
 なお *The Letters of D. H. Lawrence* は以降 *Letters* と略す。
- (2) ロレンスは1926年4月4日付の Martin Secker 宛の手紙でエトルリアについては George Dennis の *Cities and Cemeteries of Etruria* を読んだだけだと言っているが、*A D. H. Lawrence Handbook* にも “But may have read as early as 1920” (101) とあるように、この時までにはすでにこの本を読んでいたのだろうと推測される。
- (3) 1927年3月27日付 Dorothy Brett 宛の手紙で “I want to go the Etruscan places near Rome—Vei and Cervetri—then on the maremma coast, north of Civita Vecchia and south of Pisa—Corneto, Grosseto etc—and Volterra. The Etruscans interest me very much—and these are lonely places, with tombs—a dangerous malaria region in summer.” (*Letters* V 651) と述べて具体的な計画を表明している。また “a dangerous malaria region in summer” とあるが、Baedeker にも “From July to the beginning of November Malaria or intermittent fever is prevalent in remote districts of the Roman Campagna, the W. environs of Naples, around Pæstum, and other marshy districts.” (“Introduction,” *Italy: From the Alps to Naples* xiv) とあるように、マラリア

に感染する危険性はあった。

- (4) 1927年4月6日付 Dorothy Brett 宛て手紙に “Came here from Rome with Earl today—a fascinating place of Etruscan tombs. . .” (*Letters* V 27) とある。
- (5) 墓を訪れることができなかったのは “I intended to do twelve sketches, on different places but when I was ill, I left off at Volterra.” (*Letters* VI 182) とあるようにロレンスの健康上の問題からであった。また同じ手紙の中で “I wanted to do a book about 80,000 words, to be illustrated with some 80 or 100 photographs.” とあることから、かなりのページ数の本を書くつもりでいたことが分かる。ただし “80,000 words” については “It [*Tenderness*] isn’t a long novel—about 80,000 I suppose” (*Letters* VI 254) と言っていることから、ロレンスとしては大部の書物というわけではない。
- (6) たとえば “I think we shall go to Italy end of the month, to finish my Etruscans” (*Letters* VII 22), “I think by the end of the month I’ll go back to Italy to finish those Etruscan essays” (*Letters* VII 23), “I think I shall have to go back to Italy in December to finish those Etruscan essays” (*Letters* VII 26), “early in December we must go back to Italy, to Florence. I want to finish a book of essays on the Etruscans (*Letters* VII 30)”, “I wanted to go to Tuscany and finish the Etruscan essays (*Letters* VII 40)”, “I think we’ll come to Florence after Christmas. I want to do my Etruscans” (*Letters* VII 49) などがある。
- (7) 1929年11月21日付 Max Mohr 宛ての手紙に “The Etruscan book came safely and the other books, and many thanks. But why oh why will you spend your money, when you are such a Wolf in a grubel, —But I like the Etruscan book very much, and am reading it in spite of the tiresome and jaw-cracking style.” (*Letters* VII 569-70) とある。
- (8) Aldington は “Lawrence believed that the Etruscans of about 700-300 B.C. had lived largely in the way he wished to live and thought that we should all live. The Etruscans were a great convenience, for, since nobody knows much about them, nobody could contradict what he said. Lawrence ranged pretty far both in space and time in search of other modes of living which could be used either as symbols for expressing his faith or as sticks to beat the moderns.” (*Apocalypse* “Introduction” xiv-xv) と言って、ロレンスにとってエトルリアが絶好の対象であったとしている。
- (9) この点について Aldington は “Lawrence prepared himself for the task more thoroughly than is realised, in the Vatican, Papa Giulia, and Florence

Museum. . .” (*Etruscan Places* “Introduction” vi) といって、ロレンスが周到な準備をしていたと言っている。また “. . . what Lawrence hoped to give in these sketches was the discoveries of his own poetic intuition, not scholarship. . .” (*Etruscan Places* “Introduction” vi) と述べている。

- (10) Emeline Hill Richardson の引用については *The Etruscans; Their Art and Civilization* (11)。また Anthony Burgess は “His book on European history, for instance, is more Lawrentian interpretation than solid fact. Nevertheless, his highly ideosyncratic approach to the Etruscans has probably been more influential—among nonspecialists, of course—than the works of the true scholars.” (*D. H. Lawrence and Italy* “Introduction” ix-x) と言っている。他に Massimo Pallettino の “His intuition contains the kernel of the theories that were to be marshalled with the full panoply of proof twenty years later by the authoritative German historian Franz Altheim in a valuable scholarly work on Etruscan origins.” (*In Search of Etruria: Science and the Imagination* 26) といったロレンスの直感の鋭さを指摘する意見もある。
- (11) たとえば Massimo Pallettino はこの部分について “One can easily imagine the quantity and quality of the impression which this picturesque land of Etruria must have evoked in the minds of its visitors. . . .” (*In Search of Etruria: Science and the Imagination* 17) と述べている。
- (12) たとえば1928年1月1日付 Alfred Knopf 宛手紙の中で “As for the Etruscan Sketches—as you know, they are only one-half done . . . I thought of changing the title to “Tenderness.”” と言っていることから、*Lady Chatterley's Lover* のタイトル変更にも影響を与えていると考えられる。
- (13) たとえば1928年3月27日付 Earl Brewster 宛の手紙で *Lady Chatterley's Lover* について “. . . it's a novel of the phallic consciousness; or the phallic consciousness versus the mental-spiritual consciousness” (*Letters* VI 340) と言っていることから、これがロレンスにとっての大きなテーマであったことが分かる。
- (14) これについてドミニク・ブリケルは、繁栄のために軟弱になったエトルリア人は野性的なガリア人やローマ人に対する抵抗力を失ったという説は、ロレンスなどの説と同じほど無価値であると切り捨てている。（『エトルリア人——ローマの先住民族 起源・文明・言語』86）。
- (15) ロレンスはルネサンスでさえエトルリアの再度の開花であるとして “And Giotto and the early sculptors seem to have been a flowering again of the etruscan blood. . . .” (129) と述べている。またケラーもルネサンスが起こっ

たのがまさにトスカナ地方であったことに注目し「アルノ川とテベレ川の間でかつて発展し、繁栄したエトルリアの子孫たちは、たとえローマ人の移民と大々的に混血したとしても、祖先のパイオニア精神と才能は守り続けたのである。数世代を経てもエトルリア人の本質と才能は失われなかった。そうとでも考えなければ、どうにも説明がつかない現象がある。ローマでもなく、ビザンチウムでもなく、まさにトスカナ地方の諸都市で偉大なルネサンスが起こったからだ。」と言っている。

(16) *Lady Chatterley's Lover* 143.

(17) ロレンスがここで“inner ugliness”と言っているのは、時代はずれるが、たとえば古代ローマ社会の退廃を描いた Petronius の *Satyricon* など念頭に置いてのことかもしれない。ただし、時代のずれから考えれば、ローマ人には退廃へと流れる国民性があるとして言っているのかもしれない。なお作者 Petronius については Dostoevski と比較しながら、“Petronius is straight and above-board. Whatever he does, he doesn't try to degrade and dirty the pure mind in him.” (*Letters* II 521) といって不純なところがないとしている。またここには厳格なヴィクトリア朝時代の道徳観に対する批判が暗に示されているのかもしれない。

(18) ロレンスはここでエトルリア人が神の概念を持っていたことを否定するが、彼が読んだ Dennis の *Cities and Cemeteries in Etruria* の“Introduction” (xlix) でエトルリアの神々について述べているので、これはロレンスの誤解と思われる。ただしエトルリア人が宇宙と一体化して生きていたということを言いたいがために、あえてこのようなことを言ったのかもしれない。また Barker と Rasmussen は“From Greece, too, came almost certainly the whole idea of anthropomorphic gods, and in the process some of the Greek gods became assimilated with their Etruscan counterparts.” (219) と言って人格神をギリシアの影響としている。また青柳は「日本語版監修者序文」で「彼らが信じていた神々はもちろんエトルリア人固有の神々であったが、ギリシア文化の影響によって次第にギリシア神と習合するようになる。その結果、ギリシア神と同じような神話をエトルリアの神々ももつようになる。神々自身がギリシア化したのである。しかし、そのような状況になっても、神々が住む家である神殿は、決してギリシア化することはなかった。エトルリア文化が形成されて滅亡するまで、エトルリア人がつくる神殿は、基本的に木造であり、庇と内陣が大きい重厚な建物であった」(5-6) と述べている。

(19) ロレンスの“anthropomorphism”に対する批判はすでに *Women in Love* の中ではっきりと述べられている。“How stupid anthropomorphism is! Gudrun

is really impudent, insolent, making herself the measure of everything, making everything come down to human standards. Rupert is quite right, human beings are boring, painting the universe with their own image. The universe is non-human. . . .” (264) なお人格神についてはたとえばラッチェラは「エトルリアの神はギリシアの神と同じような人の姿をとるようになった. . . . 本来の原始的な自然宗教の性格は消し去られていった」(29) と言ってギリシアの影響によるエトルリアの神の人格化を指摘している。

(20) De Grummond が “It is certain that the Etruscans regarded the universe as divided into sixteen regions, whereas the Romans normally divided the sky in quarters and the Greeks in eighths.” (45) と言っていることから、もちろんこれはロレンス自身の想像力がつくりあげた宇宙論といっていいただろう。

(21) たとえばラッチェも「そして紀元前474年のクマエの海戦でエトルリアが海上覇権を永久に失って以降、冥界から人々を脅かす恐ろしい魔神が現れ始め、絵画の主題が変わり始めました。」(ラッチェ 28) と言っている。

(22) たとえばロレンスは “We ought to dance with rapture that we should be alive and in the flesh, and part of the living, incarnate cosmos. I am part of the sun as my eye is part of me.” (*Apocalypse* 103-4) と言っている。なお “dance with rapture” は壁画に描かれた踊るエトルリア人を彷彿させる。

〔引証資料〕

Aldington, Richard. “Introduction.” *Apocalypse*. 1931. London: Heinemann, 1972. v-xxiii

—. “Introduction.” *Etruscan Places*. 1956. London: Heinemann, 1975. v-viii

Baedeker, Karl. “Introduction.” *Italy: From the Alps to Naples*. London: George Allen & Unwin Ltd., 1928, xii-xl.

Barker, Graeme and Rasmussen, Tom. *The Etruscans*. Oxford: Blackwell Publishing, 2000.

Burgess, Anthony. “Introduction.” *D. H. Lawrence and Italy*. New York: The Viking Press, 1972. vii-xiii.

De Grummond, Nancy Thomson. *Etruscan Myth, Sacred History, and Legend*. Philadelphia: University of Pennsylvania Museum of Archaeology and Anthropology, 2006.

Dennis, George. *Cities and Cemeteries in Etruria*, 2 vols. 1883. Massachusetts: Elibron Classics, 2005.

- Fussell, Paul. *Abroad: British Literary Traveling between the Wars*. Oxford: Oxford University Press, 1980.
- Hostettler, Maya. *D. H. Lawrence: Travel Books and Fiction*. Bern: Peter Lang, 1985.
- Janik, Del Ivan. *The Curve of Return: D. H. Lawrence's Travel Books*. Canada: University of Victoria, 1981.
- Kezich, Giovanni. Trans. John Gatt. "Lawrence in Etruria: Etruscan Places in Context." *Etruscan Places*. Siena: Nuova Immagine, 1986. 157-68.
- Lawrence, D. H. *Lady Chatterley's Lover*. 1928. Hamondsworth: Penguin Books, 1973.
- . *Movements in European History*. Cambridge: Cambridge University Press, 2002.
- . *The Letters of D. H. Lawrence*, 7 Vols. Eds. James T. Boulton, Lindeth Vasey, George J. Zytaruc, Margaret H. Boulton, Arden Robertson, Warren Roberts, Elizabeth Mansfield, David Farmer, Gerald M. Lacy and Keith Sagar. Cambridge: Cambridge University Press, 1979-1993.
- . *Phoenix*. 1936. New York: Viking Press, 1974.
- . *Sea and Sardinia*. Cambridge: Cambridge University Press, 2002.
- . *Sketches of Etruscan Places and Other Essays*. Cambridge: Cambridge University Press, 2002.
- . *Twilight in Italy and Other Essays*. Cambridge: Cambridge University Press, 2002.
- . *Women in Love*. Cambridge: Cambridge University Press, 1987.
- Meyers, Jeffrey. *D.H. Lawrence and the Experience of Italy*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1982.
- Pallettino, Massimo. Trans. John Gatt. "In Search for Etruria: Science and the Imagination." *Etruscan Places*. Siena: Nuova Immagine, 1986. 9-28.
- Tindall, William York. *D. H. Lawrence and Susan His Cow*. New York: Columbia University Press, 1939.
- Tracy, Billy T. *D. H. Lawrence and the Literature of Travel*. Ann Arbor: UMI Research Press, 1983.
- ケラー, ヴェルナー『エトルリア——ローマ帝国に栄光を奪われた民俗』坂本明美訳 東京: 佑学社, 1990.
- デュイリエ, ジャン・ポール『エトルリア文明——古代イタリアの支配者たち』青柳正規監修 大阪: 創元社, 1994年.

ブリケル, ドミニク 『エトルリア人——ローマの先住民族 起源・文明・言語』

平田隆一監修 斎藤かぐみ訳 東京:白水社, 2009年.

ラッチェ, アネッテ 『エトルリア文明——700年の歴史と文化』 大森寿美子訳

大阪:遊タイム出版, 2001.

